

ア－1 計画のテーマと名称について

野鳥のすめるまちづくり (基本方針記載文案)

目黒区が策定する生物多様性地域戦略は、「野鳥」を都市における生物多様性確保のシンボルとしてとらえ、自然と共生する社会を目指す「野鳥のすめるまちづくり」をテーマとします。

みどりのつながりのシンボル

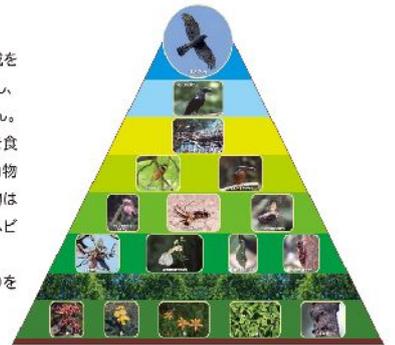
かつては面的に広がっていた緑地が減少し、市街地の中で大小の緑地が点在している目黒区のみどりの分布の特性では、個々の緑地を有機的に連絡し、機能を連携させるネットワークの形成が課題となっています。そこで、散在するみどりを行き来し、緑地を基盤に生活している野鳥を、緑地のつながりの形成のシンボルとして扱います。

みどりの質的な向上のシンボル

鳥類は、例えば森林の中では、植物や昆虫等の小動物が豊かに存在し、生態的な質が高いほど多くの種類が生息できます。そこで、季節感やうるおいを感じ、自然と共生するまちづくりを目指すうえで、みどりの量の確保とともに、生態的な質の向上を図るシンボルとして野鳥をとらえます。

生きものつながり

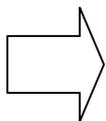
植物は太陽の光などを利用して、葉で光合成をおこなって栄養分を作り、成長しています。しかし、動物は自分で栄養分を作ることができません。そこで、チョウやガの幼虫のように植物の葉を食べたり、カマキリやクモのようにほかの小動物を食べたりしています。また、これらの小動物はカエルやヘビに食べられ、さらには、野鳥やヘビをねらうタカのなかまもいます。このような「食う・食われる」というつながりを食物連鎖といいます。



出典：(独) 国立科学博物館附属自然教育園展示

区民に親しまれる街づくりのシンボル

ウグイスの初音を楽しんだり、ツバメの子育てに一喜一憂するなど、地域住民や子どもたちにとって、庭先や身近な場所を訪れる野鳥はやすらぎや、うるおいある生活のシンボルとなっています。また、多様な野鳥の生息できる環境の条件は、一個の生物としての人間にとっても、暮らしやすい快適な環境といえます。また、目黒区は、地域とともに自然と共生する街づくりの施策を推進してきていることから、区民に親しまれ、人とともに都市に生きる野鳥を、まちづくりや活動のシンボルとしてとらえ、身近な暮らしから自然と共生する社会(生物多様性の確保)を考えるきっかけとします。



野鳥を都市における生物多様性確保のシンボルとします

- ※ 「みどり」 目黒区みどりの条例及び目黒区みどりの基本計画によります。
- ※ 「いきもの」 人を含むすべての生物を表現したものです。

ア-2 計画の名称について

「ささえあう^{いのち}生命^わの輪 新・野鳥のすめるまちづくり計画」

その他案 ちょうが舞い、野鳥がさえずるまちづくり
ささえあういのちの基本計画

(委員会の呼称)

(案) ささえあう^{いのち}生命^わの輪 検討委員会

イ 生物多様性を言い換えた言葉について

=この計画で、生物多様性を言い換えてみた言葉です

「ささえあう^{いのち}生命^わの輪

「輪」は、物質の循環や、生物相互の関係性、個体間の絆、生態系、地球の生物圏の断面などのイメージをあらわします。自然界の調和や平和、さらには日本の文化の象徴である「和」にも通じる輪です。

また、「ささえあう」とは、種類の多様性、生態系の多様性、遺伝子の多様性など、地球の長い歴史と生命の連鎖の輪の中で育まれてきた「いきものたちの織りなす世界」をイメージし、人間もこのいきものたちの輪の一員です。

※「^{いのち}生命」 生物多様性条約＝地球に生きる^{いのち}生命の条約

国際自然保護連合日本委員会の表現より

- その他の検討案
- ^{いのち}生命の^{ことわり}理
 - かけがえのない^{いのち}生命のつながり
 - 生命の調和
 - 奏で合う生命

(参考) ささえあう^{いのち}生命の^わ輪の表現の例

1 文での表現

輪ができる 輪ができる
ひと粒の種から
陽がのぼり 陽が沈み 星が輝く
雨がふり 風がふき やがて芽が出る

輪ができる 輪ができる
小さな木のまわりに
葉が茂る 花が咲く そして実がなる
虫がくる 鳥がくる 人がやってくる

輪がふえる 輪がふえる
時をかさねて
太くなる 高くなる 大木になる
大空に 枝を広げ 旅をつづける

輪になろう 輪になろう
みんな手をつなぎ
木を育て 木をまもり 森をつくろう
虫も鳥も人もつどう 森をつくろう

輪がめぐる 輪がめぐる
街と森のあいだに
春がくる 夏がくる 秋が訪れる
冬の日も あたたかな 心がかよう

輪がみえる 輪がみえる
地球のうえに
いくつものみどりの輪が 広がってゆく

輪をつなぎ 輪をつなぎ
いつか環^わになり
木と虫と鳥と人が 平和の和になる

目黒区発行:ひとと木のうた P.131 より

2 イラスト等での表現



生物多様性~

それはわたしたちの未来を守ること

平成 23 年 7 月 15 日区報より



ウー 1 将来像と目標について

(1) 将来像

50年後の私たちのまち：**野鳥のさえずりが聞こえるまち**

私たちはみどりに囲まれ、そこに育まれるさまざまないきものとふれあうことができます

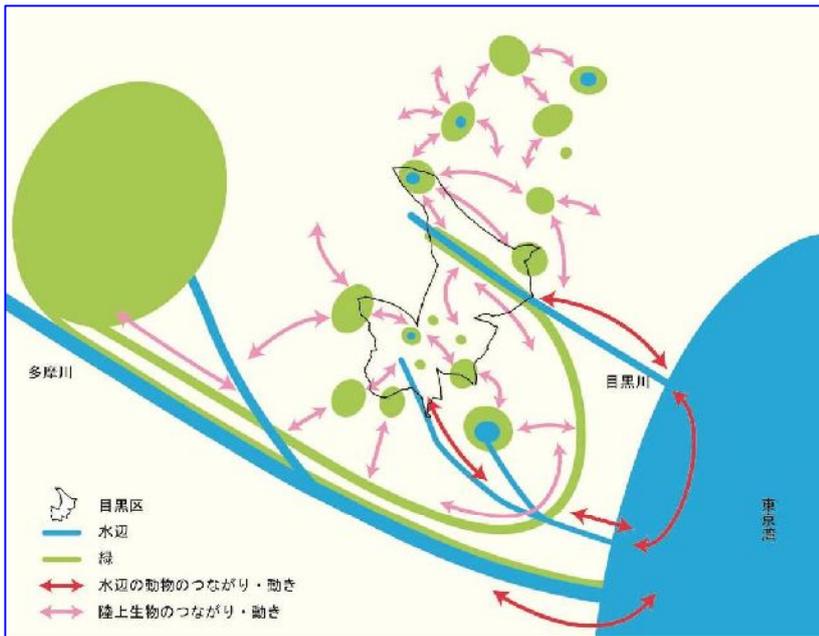
(2) 将来のすがた 1 自然と共生する社会がつくられています

- 身近な自然について多くの人を知り、生物多様性に配慮した、人に自然にやさしい暮らし方をしています
 - ・春の花や、秋の紅葉など移ろう季節のなかで、四季折々の地域の祭事や旬の自然のめぐみを使った食事を楽しんでいます。
 - ・緑被率が 20%を超え、いたるところで緑を感じる、やさしさのある街が創られています。
 - ・歩いていける距離に公園が整備され、その公園では、区民が自然とふれあう活動を活発に行っています。
 - ・目黒川の水質が改善され、区民が水辺のいきものとふれあうことができます。
 - ・地産地消を心がけるなど、区民、事業者、学校、NPO 行政等のさまざまな主体が生物多様性の重要性を理解し、家庭や事業活動など生物多様性に配慮したさまざまな行動のなかで「ともにつくる みどり豊かな 人間のまち」が実現しています。
 - ・未来を担う子どもたちが、学習や外遊び、米や野菜作りなどを通して積極的に自然とふれあい、人の暮らしといきもの・地球のつながりを実感しています。
 - ・目黒区の伝統文化が区民の中に脈々と息づき、次世代の担い手が育成されています。

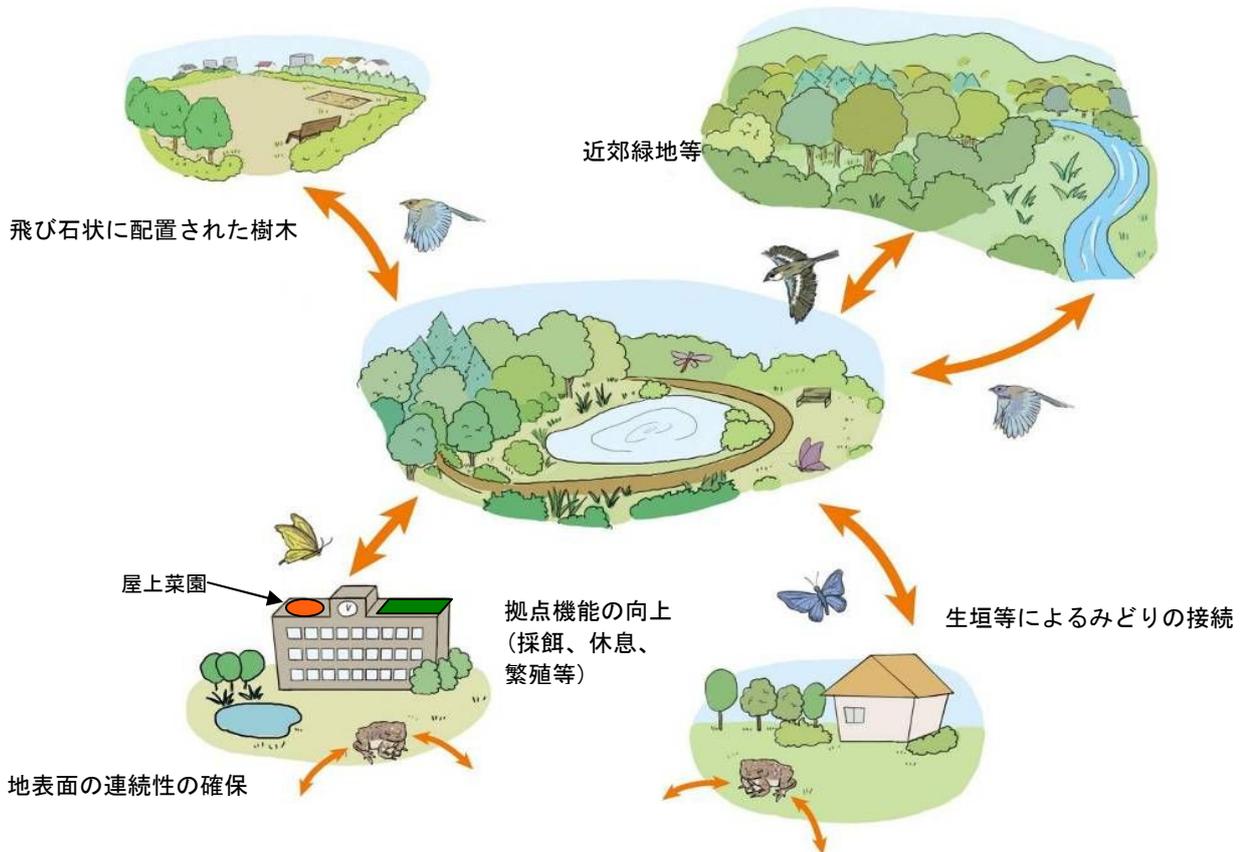
(3) 将来のすがた 2 エコロジカルネットワークがつくられ、いきものの賑わいがあります

- 野鳥やチョウをシンボルとして、広域から近隣街区、一人ひとりの足元までつながるいきもののネットワークが形成されています
 - ・自然豊かな奥多摩から、武蔵野台地の縁(へり)に残る「崖線(がいせん)」に連なる斜面の緑地をつたってたくさんのいきものが目黒区を訪れています。
 - ・目黒川等の河川では、岸辺のみどりが回復し、東京湾の生態系ともつながり、潮にのってより多くの魚が見られます。
 - ・区内では、寺社の森や公園のみどりが核となって、さらに学校林やビオトープなどとともに骨格となるいきもののネットワークがつくられています。武蔵野のいきものは、さまざまなみどりを伝って、区民一人ひとりの身近な場所まで訪れ、区内全域のみどりの質(生物の豊かさ)が向上しています。
 - ・面的な広がりだけでなく、高さや性質の異なる樹木や草など植物層が豊かになり、土壌、水辺などの保全と相まって、環境回復の目標とした指標種が一定数以上確認されています。
 - ・地域の公園や立体公園など積極的に新たに公園の整備が進み、接道部・屋上などの民有地が緑化され、土の地面がひろがり、さらには玄関先など身近なところに鉢植えを置くなど、エコロジカルネットワークが街の中に広がっています。

広域的なエコロジカルネットワーク模式図



エコロジカルネットワークの形成イメージ



ウー2目標について

目標1 みどりの風景をまもり、やさしさのあるまちをつくる

- 地形・地勢を意識した風とみどりといきもののネットワークづくり
- みどりを守り増やし、公園などみどりの拠点を整備します
- いきものの生息に配慮した自然的環境を保全・創出・育成します
- 公園の表示等でいきもののつながりを積極的にアピールしていきます
- 土を大切にします

- ・取組む内容 野鳥のすめる環境をつくる
みどり・水辺の保全及び質・量の向上、エコロジカルネットワークの強化を図り、都市に野鳥のすめる環境を作る
- ・行動の柱 守る→戻す→つくる→つなげる→育てる
- ・施策の方向性 鳥たちをまちに呼び戻す

目標2 ささえあう生命の輪、目黒の暮らしを未来に伝える

- こどもたちが自然とふれあう原体験を大切にします
- 歩いてみる知る耕すーまちを歩くことからはじめます
- 自然の暦(こよみ)を大切にします
- 里山の自然共生の暮らしを学び、ライフスタイルを転換していきます

- ・取組む内容 親しむ・ふれあう・学ぶ暮らし
生物多様性の重要性の理解促進、ライフスタイルの転換、文化の伝承、人材育成など、環境学習の推進を図ります
- ・行動の柱 親しむ→気づく→変える→楽しむ→学ぶ→続ける
- ・施策の方向性 豊かな心を育む

目標3 人・いきもの・地球のつながりを深める

- 自然とふれあう活動を通して地域づくりを進めます
- いきものつながりに配慮した事業活動を目指します
- 区民・事業者・学校・行政等が一体となってささえあう生命の輪をつなげていきます

- ・取組む内容 伝える・連携する・まちづくりの活動
みどりや水辺の保全活動への様々な主体の参加、事業活動での生物多様性配慮、NPO等の活動等の促進、情報の共有などを進めます
- ・行動の柱 知る→気づかう→加わる→広げる→輪になる
- ・施策の方向性 ささえあう^{いのち}_わ生命の輪を広げる

(参考)

○国の将来像 都市地域のグランドデザイン(第三次生物多様性国家戦略 平成 19 年 11 月 27 日)
〈望ましい地域のイメージ〉

人口も含めてコンパクトになった市街地には、高エネルギー効率、長寿命の建物が建ち並び、発達した公共交通が立派に育った厚みのある街路樹の並木の中を移動している。また、都市の中や臨海部には、低未利用地を活用して、明治神宮のような森と呼べる大規模な緑地が造成されることで各都市の中にも巨木がそびえ、その上を猛禽類が悠々と空を舞うとともに、都市住民や子どもたちが身近に生きものとふれあうことのできる小さな空間が市街地内のあちこちに湧水なども活用して生まれている。これらの街路樹や緑地は地球温暖化対策やヒートアイランド現象の緩和、都市における良好な景観の形成などにも貢献している。

丘陵地や段丘崖沿いの緑地、河川、湧水地、海岸などを軸とし、都市内で樹林地や水辺地が保全、再生、創出され、風の道が確保されるとともに、水循環の健全性の確保や健全な生態系をネットワークにすることで生物多様性の回復が図られている。土地利用に余裕が見いだせるようになった郊外部では、森林や湿地などの自然の再生により、豊かな生態系が回復している。また、その生物多様性の状態は市民が主体となってモニタリングが行われている。

地形の変化に富み、樹林を有する緑地が増え、学校や幼稚園・保育園には生きものがたくさん生息するビオトープがあり、都市に居住しながらも幼い子どもたちが土の上で遊びや冒険をしながら育っていく。また、こうした森や緑地の管理は地域の大人が積極的に協力して行うことで、子どもも含めた地域のコミュニティのつながりが強くなっている。

都市の郊外部の谷にある小規模な水田などで、保全活動が活発に行われ、共同で管理される農地で人々がいきいきと農作業などに携わるとともに、その作業のまわりで子どもたちが魚取りや水遊びに歓声をあげている。

都市住民が消費する食べものや木材について、生物多様性の保全や持続可能な利用に配慮して生産したものや近郊で採れたものを選ぶ人が増え、そうした商品に付加価値が付くことが当然となるとともに、大きな公園で開催されるフェスティバルなどで広く商品が紹介され、都市の消費者と近郊の農業者などを結びつけている。こうした水と緑が豊かな都市は、景観にすぐれ観光の拠点ともなることで活気にあふれている。

○東京都の将来像 緑施策の新展開～生物多様性の保全に向けた基本戦略～(平成 24 年 5 月)

【緑施策によって目指すべき東京の将来像と目標】

都は、これまでの取組の成果も踏まえ、次のような東京の将来像と目標を掲げ、生物多様性の保全に向けたあらゆる主体の参画と協力を得ながら、緑施策を強化し、発展させ、人と自然とが共生できる緑豊かな都市東京を実現していく。

(1) 将来像

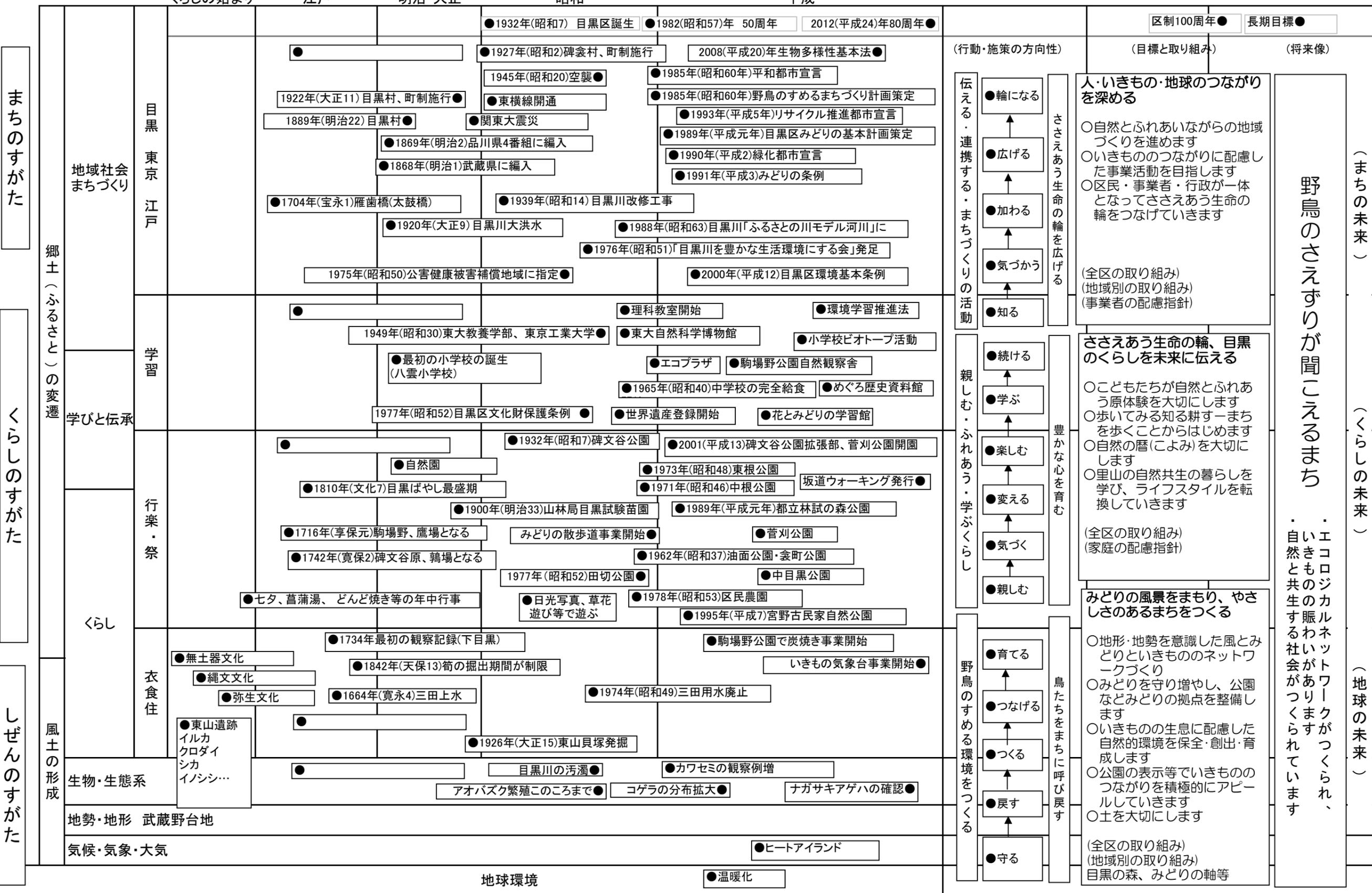
- 四季折々の緑が都市に彩りを与え、地域ごとにバランスの取れた生態系を再生し、人と生きものの共生する都市空間を形成している。
- 豊かな緑が、人々にうるおいややすらぎを与えると同時に、延焼防止や都市水害の軽減、気温や湿度の安定等に寄与し、都民の安心で快適な暮らしに貢献している。
- 東京で活動する多様な主体が生物多様性の重要性を理解し、行動している。

時が培う 目黒区の生物多様性 (作成中:参考資料)

現在

平成25年6月7日 資料5

くらしの始まり 江戸 1868 明治・大正 1925 昭和 1989 平成 2014 2020 2032 2062



まちのすがた

くらしのすがた

しぜんのすがた

(まちの未来)

(くらしの未来)

(地球の未来)

野鳥のさえずりが聞こえるまち

人・いきもの・地球のつながりを深める

- 自然とふれあいながらの地域づくりを進めます
- いきものつながりに配慮した事業活動を目指します
- 区民・事業者・行政が一体となってささえあう生命の輪をつなげていきます

(全区の取り組み)
(地域別の取り組み)
(事業者の配慮指針)

ささえあう生命の輪、目黒のくらしを未来に伝える

- 子どもたちが自然とふれあう原体験を大切にします
- 歩いてみる知る耕す一まちを歩くことからはじめます
- 自然の暦(こよみ)を大切にします
- 里山の自然共生の暮らしを学び、ライフスタイルを転換していきます

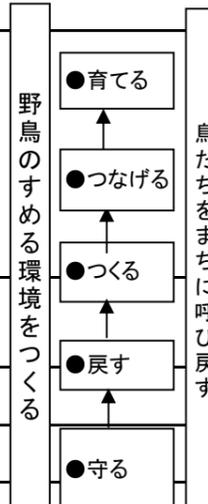
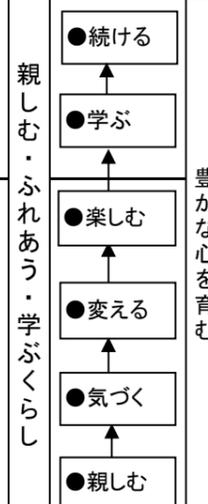
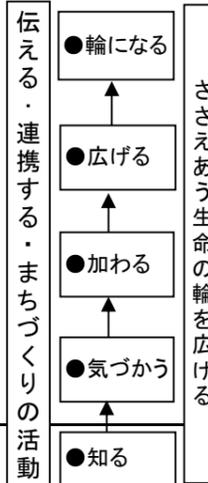
(全区の取り組み)
(家庭の配慮指針)

みどりの風景をまもり、やさしさのあるまちをつくる

- 地形・地勢を意識した風とみどりといきもののネットワークづくり
- みどりを守り増やし、公園などみどりの拠点を整備します
- いきものの生息に配慮した自然的環境を保全・創出・育成します
- 公園の表示等でいきものつながりを積極的にアピールしていきます
- 土を大切にします

(全区の取り組み)
(地域別の取り組み)
目黒の森、みどりの軸等

(行動・施策の方向性)



ささえあう生命の輪を広げる

豊かな心を育む

鳥たちをまちに呼び戻す

地球環境

●温暖化

エ 施策(取り組み)について

＝施策の例示＝目黒区等の関連計画や実施施策のほか、生物多様性の確保に向けた事業、愛知目標と目黒区の関係性等を元に編成していきます。

(1) 目黒区全体の取り組み(土台をつくる)

区内樹木の約 60%が民有地にあります。宅地のみどりの減少も見られますが、公園や社寺林、学校などのみどりが核となって、地域のみどりがつくられています。

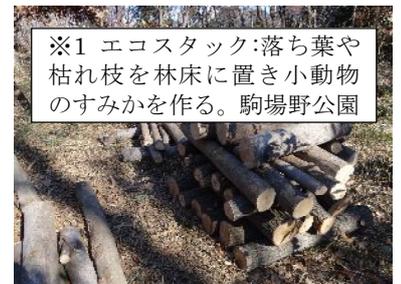
公園や川、水辺では、区民が主体となった保全活動や生物調査などの活動が行われています。また、エコ園芸や、学校ビオトープ、商店街の緑化活動など、さまざま主体により活発な活動が行われています。みどりを守り、増やしていくために、公園等の整備を進めるほか、いきものの生息空間の創出を進め、地域の連携や活動の支援を図っていきます。

野鳥のすめる環境をつくる取り組み

1) 取り組みの方向性 →鳥たちをまちに呼び戻す

2) 施策の要素 樹木、樹林、草地、生垣、林床、土壌、農地、水、生物、景観、生態系

●守る 希少種の保全を図る
生物多様性保全林(仮称)の指定を進める
公園などの舗装は最小限とし、土、地面を守る
いきものの現状や変化を把握する調査を継続する



※1 エコスタック:落ち葉や枯れ枝を林床に置き小動物のすみかを作る。駒場野公園

●戻す 裸地化した林床を、落ち葉が堆積し、腐葉土になる循環する林に復元する
郷土種の植栽を進める
トンボ等が回復するビオトープ池の設置と活動支援
生物多様性に配慮した公園・緑地等の管理
公園の樹林等での工夫(エコスタック※1、落ち葉の循環、マント・ソデ群落の保全、多孔質空間、浅瀬のある水辺、変化をつけた縁石等)

●つくる 公園の整備、公共施設の緑化、エコスクールの活動促進
みどりの効用(景観、防災、うるおい、環境浄化等)を活かしたまちづくり
接道部緑化・屋上緑化の推進
実のなる木や、蝶などの吸蜜植物などの植栽を進める

●つなげる 街路樹の整備、関連計画への反映

●育てる 生物多様性保全林の活動支援、雑木林の更新の支援
説明型表示板(メディアボード※2)でいきものつながりを説明する
※2 公園活動の中で提案された表示内容を張替えできる小掲示板。公園活動の紹介や季節の花・いきものたちの観察ポイントなどを利用者に伝えている

親しむ・ふれあう・学ぶくらしの取り組み

- 1) 取り組みの方向性 →豊かな心を育む
- 2) 施策の要素 学校教育、環境学習、暮らし、事業活動

- 親しむ 区内の自然・生物を学ぶ機会とふれあう体験の提供
80 選のいきものたちの普及(ヤモリとそのなかまたち)
区の花ハギをとおして、かつての武蔵野の原野の風景に親しむ
身近ないきもの・自然遊びなどの普及啓発
季節の花だよりの発信(ホームページやニュースレター等を活用)、
自然通信員の登録、グリーンクラブ支援、こども動物広場事業の継続
※普及啓発(講座・イベント・展示・印刷物・広報等による学習事業)
- 気づく 家庭、学校、事業者等の目黒区版配慮シートの実践
駒場野自然クラブ・いきもの発見隊等でのこどもたちの原体験の促進
- 変える いきものつながりを感じる、食育の普及
駒場野自然観察舎で里山の暮らし方を学び、ライフスタイルの転換を図る
- 楽しむ みどりの散歩道を歩いて楽しむ
自然・生物の実態把握と生き物情報の提供
食材の旬や季節の行事を楽しむ
- 学ぶ 学校でのビオトープ活動、自然とふれあう事業の推進、エコスクールの推進
季節を楽しむイベントの実施やエコ園芸の普及啓発
花とみどりの学習館の事業の促進、いきもの气象台による情報提供、
生物多様性の普及啓発
- 続ける エコラベル等の普及。個人・家庭・学校・商店街・NPO・事業者・地域の取組み等の支援

伝える・連携する・まちづくりの活動の取り組み

- 1) 方向性 →ささえあう^{いのち}生命の輪を広げる
 - 2) 施策の要素 情報共有、活動の場と機会の提供
- 知る みどりの散歩道・文化財めぐり等で歴史・文化・風土などを知る
区報等を通じて生物多様性の大切さを知る
 - 気づかう 家庭、事業者、学校等で生物多様性の配慮指針を活用する

- 加わる 公園活動登録団体などの活動に加わる
公園施設等で、NPO等の活動情報を提供する
- 広げる 地域・学校・公園等を「いきものが育つ入会(いりあい)の場」にしていく
区民の手で森を育てる、生物多様性保全のリーダーの育成
目黒区の取り組みを積極的に世界に伝える
- 輪になる 情報共有の機会の提供(駒場野フォーラムなど)、
いきもの住民会議(活動団体、自然通信員等の研修・活動報告)の開催、
他都市と連携する
区民や事業者、NPO等の連携するイベントを開催する

(2) 地域の取り組み

みどりの実態調査では、区の緑被(樹木等が地面を覆う面積の割合)は、地域によって偏在しており、緑被の少ない地域は積極的な緑化を図る必要があります。また、商店街の広がる地域や、大規模な大学等のある地域など、自然環境やコミュニティの形も地域によって個性があります。

エコロジカルネットワークの形成を図るため、このような地域の特性を把握し、施策を展開します。

- 1) 方向性 →地域の個性を生かし、みどりをつなげ広げていく
- 2) 施策の要素 コミュニティ・学校区・大規模緑地(主要公園等)毎

●めぐろの森 公園未来マップに向けた活動、生物多様性保全林(仮称)の活動支援

- | | |
|---------------------|----------------------|
| ① 駒場公園・駒場野公園・東京大学一帯 | 大学や公園の森が集中する一大緑地 |
| ② 菅刈公園・西郷山公園一帯 | 目黒川の崖線の重要な拠点緑地の森の一帯 |
| ③ 東山公園一帯 | 公共施設の跡地にできた公園の新たな森 |
| ④ 中目黒公園一帯 | 草はらや斜面樹林など多様な森の一帯 |
| ⑤ 林試の森公園一帯 | 林業試験場跡の区内最大の森の一帯 |
| ⑥ 碑文谷公園一帯 | 区内で一番古い公園を中心とした森の一帯 |
| ⑦ 駒沢オリンピック公園一帯 | 整備後50年がたち高木育つ公園の森の一帯 |
| ⑧ 東京工業大学一帯 | 呑川緑道をはさんだ大学の森一帯 |

(○活動団体のある公園を含む森)

- みどりの軸 海とのつながりを保ち広げる目黒川
緑道の整備
沿道の緑化

- 地域の緑化 緑被率の少ない地域での重点的な緑化
接道部緑化、屋上緑化の推進

(3) 私たちの取り組み

- 1) 方向性 →ひとりひとりの力を集めて、ささえあう^{いのち}生命の輪をつくる
- 2) 施策の要素 チェックリスト、配慮事項、家庭、学校、事業者、団体

●家庭用チェックリスト

やもり博士の自然ふれあいリスト

- ・一鉢の花からみどりを増やそう
- ・公園に出かけよう
- ・「みどりの散歩道」を歩いてみよう など

●事業者配慮チェックリスト

いきものたちに気を配り、分かち合う社会

●公園等のチェックリスト

いきものが生まれ育つ生命の再生する公園

(4) 推進体制と進行管理

※総合的かつ計画的に推進するために必要な事項

- みんなで取り組む体制づくり
- 進み具合の確認方法
- 進み具合の周知方法



(施策の連携のイメージ)

(3つの輪は区民・事業者等・行政を表します)

公園等（その他公共施設）での配慮事項（案）

区分	チェック内容	チェック欄
全体	モニタリング等による専門基礎調査を継続する。	
	管理計画を更新する。	
	順応的管理へ転換する。	
	住民の参加を促進する。	
樹林形成	駒場野公園等における萌芽を更新させる。	
	間伐による樹木の世代交代を促進させる。	
	階層構造を持つ樹林との関係、林床保全との兼ね合いを勘案する。	
	林床の下刈、草刈りによるマント・ソデ群落の保全、階層構造の維持・保全を行う。	
草地の管理	刈り方の工夫をした管理を行う。	
竹林の管理	切り出しの量・時期、林床の下刈り、面積規模による伐採の量・時期に着目し管理する。	
落ち葉の管理	落ち葉による堆肥を作る。	
	スミレの生育環境を整備する。	
園路等	土系、枕木系を活用した自然にやさしい舗装を推進する。	
見切り	丸太や太目の剪定枝を使用する。	
土留め	ソダ柵等を利用する。（立ち入り禁止・観察用ルート作成）	
生物誘致の工夫	生物の生息環境となるエコスタック、バイオスタックの活用、ウロ穴、立ち枯れ木、枯れ枝を残す、石積み等を構築する。	
	トンボの止まり木、ヤゴの登る植物、護岸の高さ、作り方、傾斜などに変化を持たせる。	
	有機農法を参考にした受粉昆虫等を誘致する。	
シードバンク	低木等の植栽、埋土種子集団を活用する。	
有害生物等	農薬・殺虫剤等の使用に対する考え方を整理し、なるべく薬品を使用しない対処方法を検討する。	
サイン	看板、樹名板の設置など通行人もしくは観察者へ提示するサイン(メディアボード)に工夫をこらす。	
池・流れ・水田等の水域	ビオトープ、自然池などの水際の植生管理、じゃぶじゃぶ池などの維持管理、生息生物への配慮、ケルネル田んぼの水路の保全	
	水田付近の畦、水路、斜面などを管理、整備する。	

ヤモリ博士の自然ふれあいリスト（家庭における配慮指針）（案）

区分	チェック内容	チェック欄
食	地元でとれたものを食べ、旬のものを味わいます。	
	食べ残しや食材のあまり（食品ロス）を出さないようにします。	
みどり	観葉植物など、身近に緑を増やします。	
	家庭菜園や園芸など、農薬、化学肥料、除草剤の使用を控えます。	
みず	雨水を園芸用などに利用します。	
	目黒川のぞき、そこに住んでいるいきものを知ります。	
ふれる	みどりの散歩道などを利用し、さまざまな場所を訪ね、身近な自然にふれます。	
	花とみどりの学習館や、駒場野公園自然観察舎、碑文谷こども動物広場の活動に参加します。	
たのしむ	花見や菖蒲湯、七夕やお月見など、季節の行事を楽しみます。	
しる	めぐろ歴史資料館や東京大学自然科学博物館などを利用し、地域の歴史や文化を知ります。	
伝える	自然の素晴らしさや季節の移ろいを感じて、写真や絵、文章などで伝えます。	
まもる	生きものや自然、人や文化との「つながり」を守るため、地域や全国の活動に参加します。	
えらぶ	環境に優しいエコラベル商品を選んで買います。	
	店にある商品の出身地を知ります。	
みなおす	街に出かけるときは、歩いたり、自転車を使ったりして、ゆっくり周りの風景を眺めるようにします。	
ペット	ペットを飼ったら、最後まで責任を持って面倒をみます。	
	野外の動物に餌をあげたりしません。	

以下の資料を基に作成した。

- ・「目黒区 めぐろ 26 万区民の「だれか」ではなく「わたし」から大作戦の手引き」
- ・国連生物多様性の 10 年日本委員会 MY 行動宣言
<http://undb.jp/committee/tool/action/>
- ・公益財団法人世界自然保護基金ジャパン(WWF ジャパン)ホームページ「普段の暮らしでできること」
<http://www.wwf.or.jp/join/daily/>
- ・NPO 法人ネットワーク『地球村』生物多様性 5 つのアクション
<http://www.chikyumura.org/environmental/report/2010/07/01093739.html>

いきものたちに気を配り、分かち合う社会（事業者が行うべき配慮リスト）（案）

区分	チェック内容	チェック欄
地域重視と広域的・グローバルな認識	地域の自然を重視する。	
	伝統的な生活様式、知識や工夫、慣行といった社会的・文化的な側面にも配慮する。	
	河川の流域規模、地球規模での生物多様性のつながりや、生態系サービスを認識する。	
	海外からの生物の持ち込みや持ち出しに伴う生態系への影響を考慮する。	
	サプライチェーンを考慮する。	
多様なステークホルダーとの連携	ステークホルダー（地方公共団体、NGO/NPO、地域住民等）との連携を図る。	
	原料調達地のステークホルダーにも配慮する。	
社会貢献	事業活動は、持続可能な社会があって初めて成り立つものであることを認識する。	
	社会の一員として生物多様性に貢献する。	
	社会貢献活動の目的を明確にする。	
	生物多様性の保全と持続可能な利用のために、長期的な視点で活動する。	
地球温暖化対策等その他の環境対策等との連携	地球温暖化対策、廃棄物の排出抑制や適正処分、循環資源の利用、公害防止対策、グリーン調達等の取組みと生物多様性の関係を整理する。	
	他の分野を含め総合的かつ効率的に取り組みを進める。	
サプライチェーンの考慮	原料調達などにより、生物多様性と間接的に関わりもあることを認識する。	
	サプライチェーン全体で生物多様性に与える影響を想定する。	
	サプライチェーンを構成する他の事業者と協力して生物多様性に取組む。	
生物多様性に及ぼす影響の検討	生物多様性の保全に適正に配慮するための情報を収集する。	
	事業による生物多様性への影響の有無や程度を検討する。	
	事業立地地域の、生物多様性保全上の価値を確認する。	
事業者の特性・規模等に応じた取組	全ての事業者が生物多様性と何らかの関わりを持っていることを認識する。	
	生物多様性の保全に、事業特性・規模等の特徴を最大限活用する。	

「生物多様性民間参画ガイドライン 第1版」（平成21年 環境省）P41～43を基に作成した。

http://www.biodic.go.jp/biodiversity/activity/business/bbgl/gl_participation/files/BDGL_ja.pdf

(参考)

色々な人間活動と生物多様性の関係(解説文案)

① 生物多様性とサプライチェーンの具体例

企業が画期的な商品の開発を行ったとします。この商品は、人間にとって非常に有効な道具になりえますが、実は、その部品を生産している会社は、野生生物の生息地を乱開発して工場を建て、そこで作られた製品を使って商品を開発している、といった事例があります。多くの野生動物の犠牲が伴っているということに気が付かず、多くの消費者はその商品の利便性を感じながら生活しています。

② 観光が生物多様性とどう関わりあっているのか

自然豊かな場所に行くと、様々な生き物と出会うなどの体験を通じて、生物そのもの及び生物多様性への興味が湧き、生物多様性を考えるきっかけが与えられます。その一方で、訪問者の出すごみにより場所が汚れる、生き物の生息地が攪乱される、人間の影響で生息していた生物が移動して生息数が減少するといった負の面もあります。

③ 食育が生物多様性とどう関わりあっているのか

食育は、「食べる」という人間の基本行動を通じて、その食物の生産場所はどこなのか、どういった過程を経て、我々の口に入るのか、など、食物のルーツを学ぶことです。このルーツを学ぶことで、ほとんどの食物は生き物を由来としており、多様な生き物が生育するからこそ、人間はその恩恵である「食」を得ることができると認識できます。

④ 地産地消が生物多様性とどう関わりあっているのか

地産地消とは、地元で生産された新鮮で高品質な品物を地元で消費するということです。無農薬で、化学肥料や除草剤は使っていないエコな品物を地元で消費することで、生物多様性にやさしい生産者を応援することにつながります。

また、地元の生産者と消費者の連携が密になり、コミュニティを形成するのに役立ち、独自の文化などの発展に寄与します。

⑤ 歴史文化の伝承がなぜ生物多様性に必要なのか

各地で息づく地域性豊かな歴史文化は、その地域独自の生物多様性を育む自然環境があったからこそ生まれてきたものです。歴史文化を継承することは、地域の生物多様性を継承することにもつながります。

オ 地域戦略の構成について



ささえあう^{いのち}生命の輪^わ 新・野鳥のすめるまちづくり計画

(巻頭) 未来のこどもたちに

1 目黒区が生物多様性を取り組む理由

2 自然に育まれている私たち

2-1 わたくしたちの街

2-2 大切にしてきたこと

- (1) みんなで選んだいきもの 80 種
- (2) みどりの原風景
- (3) 時が培ってきた街
- (4) みんなで取り組んできていること
- (5) そして土

2-3 育んでいきたい思い

- (1) ささえあう^{いのち}生命への気づき
- (2) 毎日の暮らしの中で もったいない！ を伝える
- (3) こどもたちに原体験の場を
- (4) 四季折々を楽しむ
- (5) 花やみどりって、いいね

2-5 計画のテーマ 野鳥のすめるまちづくり

3 ささえあう^{いのち}生命の輪^わとは

3-1 ささえあう^{いのち}生命の輪^わ 生物多様性に変わる言葉

3-2 自然のめぐみ

3-3 世界とつながる私たちの暮らし

3-4 ささえあう^{いのち}生命の輪の危機 地球温暖化と生物多様性

3-5 世界の取り組み 地球に生きる生命の条約

3-6 国や自治体などの取り組み

3-7 目黒区の取り組み

4 目黒区のいま

- 4-1 まちの成り立ち 位置 武蔵野台地 地理 地勢 歴史 人口
- 4-2 みどりの街づくり 緑地、樹木、みどりの実態調査、みどりの基本計画
- 4-3 季節の暮らし 年中行事、
- 4-4 私たちの活動 学習、活動
- 4-5 いきものたち
- 4-6 言葉の知名度 世論調査、アンケート調査から
- 4-6 進めること 課題

5 目黒区のこれから

- 5-1 計画の位置づけ
 - 法律や他の計画との関係
 - 計画の区域
 - 計画の期間
- 5-2 人と自然の関わり方 いつの時代に戻すのか
- 5-3 将来像 未来のすがた 二つのビジョン
 - 自然と共生する社会 人に自然にやさしい暮らし
 - エコロジカルネットワーク いきものの輪
- 5-4 目標と施策の方向性

6 土台をつくる(全区)

- 6-1 野鳥のすめる環境をつくる取り組み
 - 守る ●戻す ●つくる ●つなげる ●育てる
- 6-2 親しむ・ふれあう・学ぶくらしの取り組み
 - 親しむ ●気づく ●変える ●楽しむ ●学ぶ ●続ける
- 6-3 伝える・連携する・まちづくりの活動の取り組み
 - 知る ●気づかう ●加わる ●広げる ●輪になる

7 つながりをつくる(地域別の取り組み)

- 街の森 ●みどりの軸 ●地域の緑化

8 私たちの取り組み

- 家庭用チェックリスト ●事業者配慮チェックリスト ●公園等のチェックリスト

9 取り組む体制と進行の確認

- みんなで取り組む体制づくり ●進み具合の確認方法 ●進み具合の周知方法

(資料編)

区民意見の募集スケジュールについて

1) 区民参加の流れ

- 7月 ○基本方針《案》作成と区報(7月25日号)等での周知
意見募集期間
 懇談会等の実施
- 8月末 意見募集の終了
- 9月 ○第4回検討委員会(予定)
- 11月 ○地域戦略《素案》作成と区報(11月25日号予定)等での周知
 ○パブリックコメントの実施
意見募集期間
 説明会等の実施
- 12月末 意見募集の終了
- 1月 ○第5回検討委員会(予定)
- 3月 ○地域戦略策定

2) 基本方針(案)への区民意見の募集

第3回検討委員会で基本方針(案)を検討後、イベント等を通して区民に周知しながら意見を募集し、計画づくりに広く区民等の参加・協働を図る。

ア 意見募集の実施予定場所(5か所)と内容

- (1) 地域単位(2か所)：区北部方面、区南部方面(自由が丘)
- (2) 大規模公園単位：公園活動団体が活動している大規模公園(駒場野公園、中目黒公園、碑文谷公園を予定)

イ 実施時期、対象等

- ・7～8月の夏休み期間に実施。
- ・家族、親子等の参加によるイベントを実施。
(パネル展、街歩き、フォーラム、観察会など)
- ・イベントでは、公園や地域の将来の目指すべき姿をまとめる。
- ・めぐろ区報(7月25日号)で周知する。

以 上

区民意見募集の方法について（案）						
	北部地区	南部地区	駒場野公園	中目黒公園	碑文谷公園	
意見募集	日程	7月29日（月） 又は8月1日（木）を予定	8月17～18日（土、日）	8月4日（日）	8月10日（土）	7月26～27日（金、土） 8月18日（日）
	時間	夜間（19:00～20:30を予定）	各日9:00～18:00	10:00～12:00	午後	10:00～12:00
	実施場所	総合庁舎	自由が丘	駒場野公園	中目黒公園	碑文谷公園
	会場	大会議室	フィナンシャルオアシス自由が丘（あおぞら銀行）	自然観察舎又は拡張部管理棟	花とみどりの学習館	碑文谷体育館3F会議室を予定
	実施方法	説明会	講演会、パネル展、個別説明	第2回 駒場野フォーラム	公園を話し合う会	碑文谷公園くらぶ定例会
	対象	一般区民	一般区民	一般区民公園活動団体	一般区民公園活動団体	公園活動団体
	意見募集方法	聞き取りアンケート	聞き取りアンケート	聞き取りアンケート	聞き取りアンケート	アンケート
イベント	イベントタイトル	身近ないきもの写真展	めぐろいきもの学校	第2回 駒場野フォーラム	生物多様性応援イベント[夏休み親子虫取り教室]	いきもの発見隊
	日程	7月16日（火）～31日（水）	8月17～18日（土、日）	8月4日（日）	7月21日（日） 8月10日（土）	8月24又は25日（土）、（日）
	時間	終日	10:00～12:00	10:00～12:00	10:00～12:00	10:00～12:00
	実施場所	総合庁舎西口ロビー	フィナンシャルオアシス自由が丘オアシスルーム（あおぞら銀行）	駒場野公園	中目黒公園	碑文谷公園
	実施方法	—	エコライフめぐろ推進協会、自由が丘商店街振興組合などとの協働	第2回 駒場野フォーラム	いきもの池・原っぱクラブ活動（学習館との協働）	いきもの発見隊（碑文谷くらぶとの協働）
	内容	パネル展	街歩き	観察会	観察会	観察会
	講師等	—	—	—	いきもの池・原っぱクラブ会員	専門家を予定
定員	—	各日 親子15～20組を予定	—	各日 親子10組	60人	
*その他の公園で活動している公園活動団体についても、アンケートによる意見の募集を検討している。						